

私を救ってくれた言葉

広島県 広島県立呉三津田高等学校二年 猪田 凜

「若いくせに堂々と座って、ほんまいいご身分じやわ。」

これは、私が学校帰りのバスで見知らぬおばあさんにかけられた言葉です。その日は猛暑日で、学校からバス停まで重い荷物を背負って歩き、バスに乗り込む頃にはすっかり汗だくで疲労困憊していました。空いている席を見つけるや否やすぐに腰を下ろし、ようやく一息つくことができました。膝に置いたりユックに体重を預け、目を閉じ、睡魔と戦いながらバスに揺られていると、いつの間にかたくさん人が乗り込んで来て、席がいっぱいになっていることに気がつきませんでした。

三つ目のバス停に到着したとき、一人のおばあさんが私が座っている真横の握り棒を掴んだのに気がつきました。ふとおばあさんの方に視線を向けると、鋭い視線が返ってきました。怒られる、そう感じて

一瞬身構えました。すると、おばあさんは冒頭の言葉を吐き捨てるように言いました。大きめの声だったので車内の注目を集め、恥ずかしさと焦りですぐに席を立ち、

「すみません、座られますか。」

と尋ねました。しかしおばあさんは、

「もうええ、すぐ降りるけん。」

と言って私を座らせ、バスは発車してしまいました。バスが走っている間もずっと見られている気がして落ち着かず、その時間がすごく長く感じられました。結局そのおばあさんは次のバス停で降りていったのですが、私はあまりの肩身の狭さに座っていられず、席を立て握り棒を掴みました。少し周りを見渡すと、確かに車内はぎゅうぎゅうでした。どうしてこんなにも人がたくさんいることに気がつかなかったんだらう、お年寄りが座れずにいる中で高校生が座

っていてどう思われたんだらう、みんな私を非難しているに違いない、ただただ後悔して、そんな考えが頭の中をぐるぐると巡っていました。

最寄りのバス停に到着すると、私は一刻も早くバスを降りたくて、急ぎ足で外に出ました。すっかり落ち込んだ気持ちで歩いていると、背後から、

「お姉ちゃん。」

と声をかけられました。振り返ると、同じバスに乗っていた一人のおじいさんがいました。

「あ、はい。」

「お姉ちゃん、可哀想じゃったねえ。大きな声で怒られて怖かったじゃろ。」

思いがけない優しい声に安心したと同時に、先刻の恐怖が蘇って思わず涙が溢れそうになるのを、ぐっと堪えました。

「いえ、大丈夫です。」

なんとか絞り出した声は、自分でも分かるくらいに涙声でした。おじいさんは、優しく微笑んで、言葉が続けました。

「そんな大きいかばん持って、毎日大変じゃねえ。

あのおばあちゃんよりお姉ちゃんの方が席が必要なのはみんな分かっちゃったよ。」



私は、涙を堪えるのに一生懸命になりながらも、おじいさんの一言一言でだんだん気持ちが悪くなっていくのを感じました。

「若い人は立っとかんにゃいけんとか、お年寄りには席譲らんにゃいけんとか、別にそんな決まりはないんよ。余裕があるときに譲りゃいいけんね。」

おじいさんは最後に、

「頑張っつね。」

と言って帰って行きました。私が慌ててその背中に、

「ありがとうございます。」

と叫ぶと、振り返って頷いてくれました。

この経験から私は、直接伝えることができる優しいさって素敵だなあ、と感動しました。私がおじいさんの立場だったとしたら、このように直接言葉をかけて励ますことはできなかっただろうと思います。誰かが誰かに理不尽に傷つけられている場面を、私はこれまでに何度も目にしてきました。私はそのような時にどんな言葉をかけるべきか分かっていても、もし余計に傷つけてしまったら、ずれたことを言って困らせてしまったら、と怖気づいてしまい、目を逸らしてきました。しかし、私がおじいさんの言葉に気持ちが救われ、同時に自分も落ち込んでい

る人に優しい言葉をかけた、とも思えました。心が沈んでしまったときに誰からかかけられる一言が、こんなにも心に響くということを知りました。おじいさんの優しさを胸に、その感動をこれからの人生で生かし、私も勇気ある優しさを持って周りと接したい、と強く感じました。